



目次

特色GP .....	1
センターから .....	2
キャンパス情報	
ー各学部からー .....	3
聞いて欲しい私の意見	
ー教養教育こうしてほしいー ..	6
Voice	
ー教養科目を面白く聴く工夫ー	
.....	7
教養教育古今東西 .....	8

(平成19年10月発行)

## 理系基礎教育に関する 茨城大学の取組が特色GPに採択

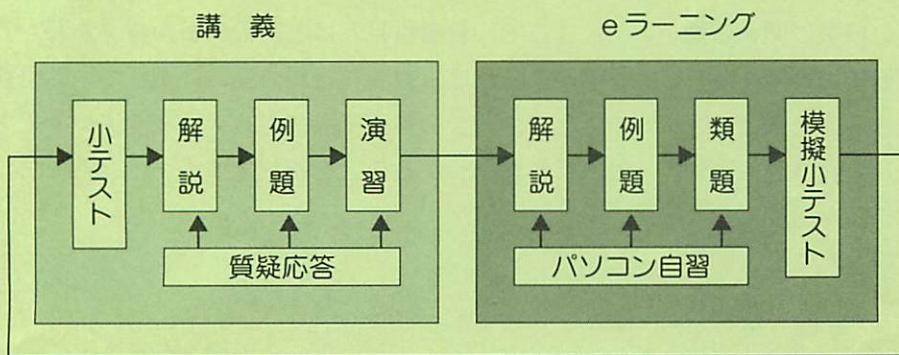
自然系基礎教育専門部会長 曾我日出夫

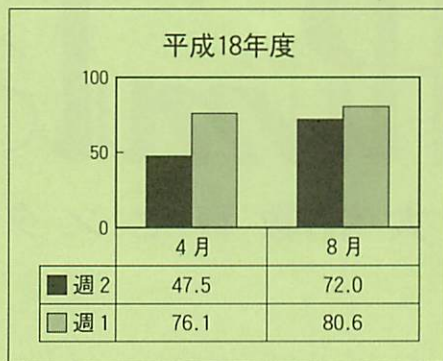
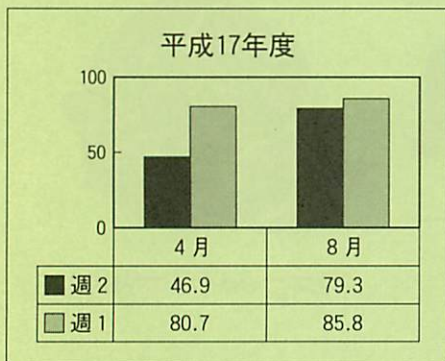
特色GP（正式には「特色ある大学教育支援プログラム」とは、平成15年度から毎年文部科学省が、大学・短期大学の教育改善を目指した取組を公募し、特色ある優れたものを選定するとともに広く社会に情報提供しているものです（約15%が採択）。茨城大学では、4年ぐらい前から大学教育センターが中心となって、教養科目における理系基礎教育を見直し充実させることに取り組んできました。この取組を平成19年度の特色GPに申請したところ、選定され、計画推進のための予算的な支援も受けられることになりました。その取組内容は次のようなものです。

工学部などの皆さんは、入学時にカードで答える微分積分の基礎テストを受けたと思います。これは、高校時代の微分積分の復習が必要な人を早い時期にみつけて、その人たち向けの週2回の授業を

受けてもらい、前期終了時には他の人たちに追いついてもらおうとしたものです。理系の基礎勉強は積み上げ的な努力が求められます。最初が不十分だといつまでも修得できず、3年4年になって非常に困ってしまいます。こんな人が少なからずいることが、基礎テストのクラス分けから始まる一連の取組を始めた理由です。週2回のクラスでは、授業の復習を徹底化するため、インターネットとパソコンを利用して、eラーニングによる自習（毎授業の復習）をすることになっています。つまり、この授業は下図のような構成になっています。さらに、週1回の標準クラスの方も、修得すべき内容を明確にし、統一の教科書や試験を使ったり、担当者間の打ち合わせを行ったりすることで、どの担当者のクラスも履修後の合格者の最低レベル（基礎学力レベル）がそろうようにしています。

週2回クラスの教育効果をみるため、4月に実施した基礎テストを8月に再び実施し、成績の上昇を調べたところ、次の図のような結果を得ました。





この図より、週2回クラスの平均が概ね週1回クラスに追いつていることが分かります。

上記のような考え方ややり方を、平成17年度前期工学部対象の微分積分基礎科目から実現していき、現在物理学についても同じようなやり方を導入しています。来年度は、後期の微分積

分の授業についても対象にしようとしています。さらに、ここで開発されたeラーニングのアイデアを広く拡大していくことを予定しています。また、理系基礎教育において、物理学実験や化学実験の導入教育も行おうとしています。

以上のような取組を特色GPに申請したところ、今回めでたく採択されたという次第です。この取組の企画や運営は、大学教育センター内の自然系基礎教育専門部会（具体的なことはその中の理系基礎教育部）が行っています。学生のみなさんも、この取組の進展に期待してください。

## センターから

### 大学教育センター

#### 副センター長 山中 一 雄

円周率をおよそ3と教えることについて批判的な議論が巻き起こったのはもうだいぶ前のことですが、今となっては何が問題だったのかよくわかりません。新井紀子さんの本によると、そもそも円周率とは何であったかちゃんと言えない人が多いのだそうです。どのみち、小数点以下のあるところから先はどんな数字が並ぶか誰も知らない数なのですから、「およそ3」というのは、むしろ示唆に富んだ巧みな言い方のように私には思えるのですが。

大学教育センターでは、教養科目の授業に関する受講者アンケートを実施しています。翌年の授業をよりよいものにするためのものであり、皆さんの声は皆さんの後輩（ときには再履修する自分）の役に立ちます。そのアンケートが今年度から変わりました。変更の要点は、目的を受講者満足度の測定に絞ったこと、回答の選択肢をY/Nの2個にしたことの2点です。新方式の導入にあたってさまざまな議論があり、とくに2択方式については、学生さんからも「2択では粗すぎ」

の声が寄せられました。これについては、つぎのように理解してほしいと思います。知りたいのは満足度のみです。それを、満足度に係る質問10問に対する回答Yの数によって測るので、結果は11通りあります。いわば、「満足ですか」の質問への回答に、11の選択肢を用意したようなものです。この点で、質問毎に別々の調査意図がある従来のアンケートとは全くちがうのです。詳細については、大学教育センターのウェブサイトをご覧ください。とはいえ、われわれもまだ手探りの面が多々あり、皆さんの理解と協力を得てよりよいアンケートにしてゆこうと考えています。

ところで、教養科目とはどんな科目か皆さんわかりますか？それは、教養科目履修案内に載っている科目のことです。この答を不満に思う人は教養人の卵です。やがて答が見つかることを祈ります。

## キャンパス情報 —各学部から—

### 人文学部から

#### 新カリキュラムと教養教育

人文学部教務委員長 古屋 等

人文学部での新カリキュラムの導入も今年で2年目、来年で3年目を迎えます。

新カリキュラム？すでに教養教育を受けられている1・2年生の方にとっては、余り耳慣れない言葉かも知れません。入学された年度によってカリキュラムが異なるという、制度の改編期にあるため、1・2年生と3年次以上の方では、カリキュラムに関する関心も異なることだろうと思います。すでに半年、あるいは1年半、教養教育を受けられている1・2年生の方にとっては、新カリキュラムの特色は、もうご存じのことではないでしょうか。現在、受けられている科目が、新カリキュラムによって構成されているのです。

科目区分としての「分野別教養科目」と「分野別基礎科目」の新設、そして人文学部では、「主題別ゼミナール」が1年間を通じて、隔週で開講されています。このうち、「分野別基礎科目」と「主題別ゼミナール」については、少々説明を必要とするかも知れません。従来、教養科目として開講されてきた大部分の科目が、「分野別教養科目」に該当します。これに対して、専門科目に対する橋渡しの科目として、「分野別基礎科目」が導入されました。同じく教養科目に該当しますが、内容的には自学部自学科の学生を念頭に置いた科目群になっています。また専門科目も内容的に、科目群として「専門科目Ⅰ」と「専門科目Ⅱ」に区分けがなされています。これも、内容的な専門性の違いに由来しています。つまり、ゆるやかな積み上げ型の教育体系が導入されているわけです。

主題別ゼミナールのような演習形式の科目についても、同様です。専門科目では、2年次に「基礎演習」、3・4年次に「専門演習」を受講しますが、これらの演習形式の授業のための基本的な方法を学ぶのが「主題別

ゼミナール」です。発表のしかたやレジュメ・レポートの書き方、テーマの選択や必要な文献や資料の収集のしかたなど、大学生活において必要とされる基本的な技術のほか、ものごとの基本的な考え方を具体的な事例を通じて、少人数の学生で学びます。したがって、大学生として必要とされる基本的な技能を中心に学ぶのが「主題別ゼミナール」といえるでしょう。

主題別ゼミナールの先生が学生担任として、皆さんの履修相談や学生生活の支援にあたるため、年間を通じて接触する機会をもてるようにという趣旨から、15回という授業ながらも、授業の期間は前期と後期の1年間に及んでいます。したがって、授業の開講が隔週になってしまうため、ちょっと間延びしたような感じになってしまうかも知れません。でも、空いている週は図書館などで調べたり、他の受講生と一緒に勉強したりするなど、自主的な学習のための重要な時間でもあります。そのような意味も込めて隔週開講になっていますので、授業のない週をより効果的に活用できるように、授業の趣旨を十分に生かすように心がけてください。

### 教育学部から

教育学部教務委員長 生越 達

教育学部では、今年度から新しく、教養の分野別基礎科目として「ことばの力実践演習」という授業が開講されています。教育学部の学校教育教員養成課程の必修科目となっています。

新しいスタイルの授業で、コミュニケーション力を育てることを目的としています。通年開講の授業です。すでに前期の分は終わったわけですが、テーマを決め、ひとりずつ話をし、それをほかの学生たちが聴くという授業が行われました。

後期は、附属や近隣の小中学校の協力を得て、子どもたちとのやりとりのなかで、「書く」ことを含めたコ

コミュニケーション力を育てていくことを目指します。教育学部では、1年生での主題別ゼミナール、3年生での総合演習とあわせて、コミュニケーション力を育てることに力を入れていて、「ことばの力実践演習」はそのために新たに創設された授業です。

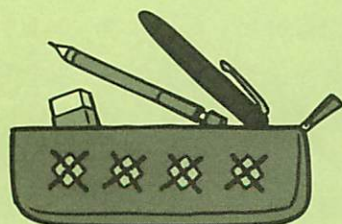
先日、この授業の担当教員が集まって授業の反省会を開きました。またこの授業の開講にあたっては、すでに数度の担当者会議を開いてきました。

そして、私は、このようにして授業が作られていくプロセスにとっても心強い印象をもちました。それは、教育学部の先生がたが集まり、授業について検討し合おうということが、そこに実現していたからです。もちろん、いろいろな意見があり、必ずしも授業のすすむべき方向性が一致していません。意見の対立もしばしば生じます。それでも、授業を一緒に作ろうとする教師の対話がそこにあったことは紛れもない事実なのだと思います。

将来的には、「ことばの力実践演習」だけではなく、もっともっと先生がたが、授業について検討する機会ができたなあと思っています。先生どうしが互いの授業を見せ合いながら、自分の授業を鍛えていくことができる雰囲気ができたら素晴らしいことではないでしょうか。

私自身、自分のことを振り返ってみても、授業の難しさというものを感じます。私はすでに十数年教師をやっているわけですが、だんだん授業がうまくなるかという、そういうわけでもなく、なんとなく以前より授業の雰囲気がよくないと感じることも多々あります。

本来授業とは、つねに自分を開き、自分を変えながらつくっていくものなのではないでしょうか。授業は生き物なのです。だからこそ、授業者にはつねに自分を開いておく勇氣、つねに学ぼうとする謙虚さが求められるように思います。



## 理学部から

理学部教学委員長 横 沢 正 芳

水戸キャンパスは工事ラッシュで驚かれたことでしょうか。暫らくは工事現場の音を聞きながら勉学に励んでください。確かに、騒音はきついです。建物が新しく生まれ変わるのを楽しくもなるものです。日本で最初にノーベル賞を受賞した湯川さんが、戦後の復興の中で、大学構内に鳴り響く槌音に勇氣付けられ新しい研究に駆り立てられていったと回想されています。之ほどに高尚なことではありませんが、一足早く工事を済ませた理学部の建物で学生の皆さんが直に楽しんでいるスペースがありますので、紹介しましょう。

今年度の4月から、オープンしたラウンジです。全面ガラス張りなので通路からは中が丸見えなのですが、学生のみなさんは平気で食事をし、おしゃべりし、その中で、ノートをとって勉強する姿が多く見られます。近くに総合情報処理センターの演習室があり、理学部の学生のみならず全学の学生が行き来する交通量の多いところで、たくさんの人々に見られているはずなのですが、平気で勉強しています。実は、一昨年度に別の場所に学生が自由に使える学習室をオープンさせたのですが、必ずしも利用頻度は芳しいものではないのかなと見ていました。そこは、古い建物の1階で若干薄暗く感じる場所でした。今回オープンしたラウンジは陽が当たる明るい場所で、イスなどの調度品も赤、白、緑とカラフルであり、カジュアルなもので統一されています。以前の学習室には別の部屋で余ったソファなどが持ち込まれていたようです。学生が利用する部屋はクオリティが高いものでないと駄目なのかもしれません。

今回の工事で、理学部に2番目のラウンジがオープンします。講義棟の2階の入口にガラス張りのラウンジが設計されています。今は、工事でうるさくとも新しくできるスペースを楽しみにして勉学に励んでください。

## 工学部から

工学部教務委員長 栗原和美

昨年に引き続き、今年も「こうがく祭+オープンキャンパス」が6月2日(土)に開催されました。多くの新入生諸君が日立キャンパスの見学会に参加されたことと思います。日立キャンパスは東に太平洋、西に高鈴山(標高623m)を擁した阿武隈山系の南端に囲まれた温暖な地域にあります。高鈴山ハイキングコースをはじめ、多くのハイキングコースがあり、春秋の頃には、山々の頂から遠く日立海岸一帯から雄大に広がる太平洋までが一望できます。また、海外線に近く、清らかな水、白い砂で、古くから茨城県を代表する河原子海水浴場が近くにあります。最近、四季を通して、ウインドサーフィンを楽しむ若者が増えてきたようです。これも地球温暖化の影響でしょうか？

さて、私はモーター(学会用語ではモータという)の研究をしています。モーターは100年以上の歴史があり、日本では世界のモーターの50%以上(台数)を生産しています。そして、ロボット、自動車、家電製品、OA機器、FA機器等、多くの分野で使用されています。今まさに、企業において、団塊世代の退職により、技術の伝承に危機が迫っています。端的にいうと、技術者が相当数不足しているのです。何故、モーター技術の伝承が難しいのか？それはモーターがMaxwellの方程式で表わされる電磁現象によりトルクを発生し、負荷(コンプレッサー、ファン等)をインバータにより速度制御して、駆動しているからです。このため、技術者には、電気磁気学、電気回路、電子回路、力学さらに進んで、電気機器学、制御工学、パワーエレクトロニクス等幅広い知識が要求されるからです。また、最近では、高性能新磁石(Nd-Fe-B磁石)を利用した高効率モーターが主流になり、永久磁石を含む電磁界解析や磁気工学の知識が必要になっています。電気磁気学や力学を理解するためには、基礎となる「数学」、「物理学」、特に、教養・分野別基礎科目の「微分積分」、「力学」を1年次にしっかり勉強しておく必要があります。また、インターネットの普及により、世界は狭

くなり、外国の大学、学会との連絡が容易にできるようになりました。「英語」は勿論、未修外国語(ドイツ語、中国語・・・)をしっかりと勉強しておきましょう。

来年4月には、満開の桜が学生諸君を暖かく迎えてくれることでしょう。勉学の傍ら、日立の自然を満喫するのもいかがでしょうか？

## 農学部から

「教養」と「卒業以後」

農学部教務委員長 渡部信義

皆さんは、大学に入学し、「さあ、専門分野の勉強を思いっきりやるぞ」と張り切っていたことでしょうか。ところが、ガイダンスの説明やシラバスによって、1年次には教養科目が主に開講されることに気づいたと思います。なぜ「教養科目」があるのでしょうか。8月23日付けの日本経済新聞に、私大生を対象とした調査から、大学生の5割は「大学は学歴のため」と考えていることが報道されました。卒業後のことを絶えず考えていることがうかがわれます。

さて、皆さんの先輩のすべてが、大学で学ぶ「専門分野」関連の職場に就職するわけではありません。また、大学における「専門科目」を履修したからといって、直ちに「専門家」になれるわけでもありません。学問は限りなく広く、深いものであって、挑戦する人には自身の無力を感じさせることすらあるのです。

皆さんには、自身の学習成果、授業で得られる知識の断片、皆さんの経験および友人との交流を自身の中で統合し、自身の思想や世界観を作る作業が必要なのです。人間力を磨く作業が本来の学習なのです。何一つ無駄は無いのです。一枚の学位記になにがしかの力はあるとしても、「水戸黄門の印籠」の「葵の御紋」のような力を持つと考えることはできません。いくら「専門科目」を学んだといっても、「それで……それがどうしたの？」とひと言でかたづけられることがあるのが現実の社会なのです。社会で生き抜くための人間力が必要です。

「勉強を思いっきりするぞ！」と決めたのであれば、

それを在学中、そして卒業後も持続して欲しいと思います。「大学で尊敬されるのは、人一倍学ぶ学生であって、家柄ではない」という言葉は、M.V. ロモノソフ（モスクワ大学創立者）の言葉として伝えられています。「人一倍学ぶ学生が尊敬される」ことは、どこの大学にも共通する原則のように、私は思います。

学んだからといって成功が約束されるわけではありません。しかし、社会で成功した人々は例外なく学び続けています。宮本武蔵は29歳のときに巖流島で決

闘しています。けれども、そこで人生が終わったわけではありません。30年近く余生があったのです。皆さんには、卒業以後に、更に60年以上の人生が待っています。そのとき、大学で学び、自身の中で統合化し、育んだ世界観と事象へのアプローチの方法が皆さんの支えのひとつになって欲しいと思うのです。そのとき「教養科目」の内容の一部が要素のひとつであることを発見するでしょう。

## 聞いて欲しい私の意見 – 教養教育こうしてほしい –

### 教養教育に物申す

人文学部社会科学科2年 村松昭典

教養教育の目的は、さまざまな分野について興味を持ち、知識を深め、視野を広げていくことだろう。幅広い分野から講義が開講されているので、興味のあるものは必ずあるだろうし、それを選択することで意欲的に講義を受け、知識を吸収することができる。しかし実際は、履修する学生の立場からみて、教養教育には多くの問題点があると思う。

まず、幅広い選択肢の中から、自分の興味がある講義を見つけ出しても、それを履修できないときがある。募集定員を大きく上回ると、抽選が行われる。ここで一部の学生は抽選にもれてしまい、その講義を履修することはできない。自分が受けたいと思った講義を履修できないということは、モチベーションを下げ、やる気をなくすことにつながりかねない。私もそのような経験をしたことが幾度かあるが、そのたびにがっかりさせられたものである。またそのようなとき、ほかの講義の多くは募集を締め切っていて、選択肢がかなり限られてしまう。より多くの人数を受け入れるために、大きな教室に移動したりして、全員が希望する講義を受けることができるようにすべきである。

次に、選択の際に、多少の縛りがあることだ。人文の分野から何単位、自然の分野から何単位、などの指定があるので、完全に自由選択できるわけではない。そのため、自分がまったく興味がないものを仕方なく

選択しなければならないこともある。たしかに、興味がなくても、これからの自分の人生において役立つことかもしれないし、決して無駄になることはないと思う。多少の縛りが存在する理由は理解できなくてもいい。ただ、興味がなければ意欲的に勉強することはできないし、知識として吸収できるものも限られてしまう。さまざまな分野について学び、視野を広げることとても重要だが、興味や関心のある分野について、知識をより深くすることも大切だと思う。さらに選択の自由の度合いを強めてほしい。

また、一部の講義では、ある程度の知識があることを前提として講義を開始することがある。シラバスにそのような説明が書かれている場合が多いが、必ずしも、履修する人すべてがある程度の知識を持っているかどうかはわからない。興味があるが知識はない、抽選でもれて仕方なく選択した、そのような人もいるはずだ。このような人たちも考えて、一定の知識を前提とする講義を設ける場合には、もちろん同じ時間帯に、ある程度基礎的なことから始める講義も必ず設けてほしい。

教養教育は大学での勉強の入り口である。そこでは学生の興味や関心を大切にして、意欲的に勉強していくことが重要だと思う。教養教育が大学での勉強において、土台を担うものとなってほしい。

## 工学部電気電子工学科4年 小 関 涼 平

私が大学一年の頃、よく人と話しをしていると必ずといっていいほど大学の話になりました。そこで、大学では何を勉強しているのかと尋ねられ、自分は一年生なので専門科目の授業は少なく、ほとんどが教養科目の授業であると答えると、「大学まで行ってなぜ教養を学ぶのか、教養を学ぶ理由はどこにあるのか」と、質問されました。私はその質問に対してうまく答えられなかったことを今でもよく覚えています。なぜ教養科目は必要とされているのでしょうか。

私は工学部生です。これは私の持論ですが、工学部生だからといって専門科目ばかり勉強して良い成績を残し企業に就職すれば、物を作ったり、製品開発に携わったりすることはできると思います。しかし、それは“仕事ができる”というだけのことであって、人にとって、“仕事”は人生の一部にしかすぎないのです。今問題とされていることに、賞味期限詐称や、食品の中に不正なものを混入させ利益を得るなどといったこ

とがあります。仕事のできる人でも、社会的常識やモラルがない人は世の中にはたくさんいるのです。

このような問題を解決するのに、大学生という時期に教養科目を学ぶことは重要だと思います。教養は、その人の考え方や価値観を変えるのに一役買っているからです。

教養科目に対して意欲を持って取り組むためには、魅力のあるトピックス、また、工夫を凝らした授業が必要です。アイデアとしては、選択できる科目を増やし、一つの授業に参加できる人数を減らすこと。選択できる授業を増やすことによって学生は自分の興味のある授業を選択できるし、一つの授業に参加できる人数を減らすことによって、先生と学生の距離は縮まり、積極的に授業に参加できるようになると思います。そしてもう一つ言いたいことは、出席日数三分の二で単位が取得できるというのは少々甘い気がします。

教養科目に意味を持たせるためにもこのようなことを改善し、“奥深い人格”を形成するために、より良い教養教育を実施する必要があると思います。

## Voice - 教養科目を面白く聴く工夫 -

## 農学部資源生物学科2年 菊 地 聖 永

大学の授業は専門科目と教養科目に分かれていて、一年次は教養科目中心の授業になります。教養科目は共通基礎科目と主題別科目から成り、外国語や情報、人文・自然・社会など幅広い分野からさまざまなテーマの授業が用意されています。

特定の分野を勉強したくて大学に入ったのに、嫌いな英語や数学、歴史などをまた勉強しなくてはいけないと思う人もいることでしょう。でも、二年次からはいやというほど専門科目が待っているのです。ですから一年次は、さまざまな分野の知識に触れ、自分の世界を広げるための時間にすればいいと思います。

教養科目を面白く聴くには、やはり、多少なりとも興味・関心のある授業を選択することが一番です。シラバスにはその授業の概要から到達目標、授業計画ま

で詳しく記載されています。シラバスをじっくりと読み、興味のある授業を探してみてください。専門科目と異なり、教養科目は到達目標が低めに設定されているため、そんなに気を張って覚え込もうとしなくても大丈夫だと思います。毎回休まずに出席し、耳を傾けているだけでも十分に到達目標は達成できます。

もし興味のある授業が見つからなかった時は、単位が簡単に取れそうな授業を選択しておけばいいでしょう。興味のない授業を聴いて、単位も落としたのではあまりにも無意味です。シラバスに定期試験、レポートなどの成績評価基準が記載されているので、これを参考に授業を選択すればいいと思います。また、先輩からの情報も有効です。レポートの提出を求める授業には、出せばOKというものから、課題・評価ともに厳しいというものまでさまざまなので、その辺りのことを聞いておくといいでしょう。

今は無意味に思えるかもしれませんが、教養科目でさまざまな分野の知識に触れることは、後々必ず生きてくることだと思います。二年次からは専門科目中心

の授業になり、選択できる教養科目は少なくなってしまう。ですから、一年次のうちに、できるだけさまざまな分野の授業を受けておくことをお勧めします。

## 教 養 教 育 古 今 東 西

### 常識を疑い自分のモノサシ作りを

人文学部教授 伊藤 哲 司

「常識を疑ってみる」という一風変わったテーマを掲げ心理学の教養科目を担当している。幸いなことに毎年、多くの学生たちが私の授業の受講を希望してくる。中には、「先輩にこの授業を勧められた」といった嬉しい声も聞く。

大人数の授業でも対話をできる限り重視し、受講生たちには毎回のよう意見や質問を書いてもらっている。そして次の授業の最初に、興味深い意見を紹介し、質問があれば応答する。ときにそれが、授業時間の半分近くを占めてしまうこともある。

たとえば、「自分はマインドコントロールにかかるわけがない」と思っている学生たちに、「皆さんの家にある幾種類もの石鹸の類は、本当にすべて必要なか?」と問いかける。そして、「そんなに多種類の石鹸を使っているのは、『清潔で快適な生活を送るには、用途別の石鹸が必要だ』という『石鹸マインドコントロール』にかかっている故なのではないか?」と畳みかける。すると、「自分はマインドコントロールとは無縁」という「常識」が揺らぎはじめるようだ。

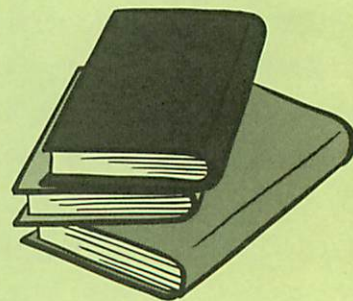
そういったところから、自分なりの思考が始まっていく。基本的に答えがひとつしかない「勉強」とは違って、「学問」の世界では答えがいくつもありうるから、すっきりとした結論はなかなか出ないかもしれない。どのような答えが妥当であるかは、自分のモノサシで判断しなければならない。村上陽一郎氏(科学史)に倣って言えば、そのモノサシこそが「教養」である。そして、それは一朝一夕にできるものではない。毎日新聞に目を通し様々な書物に触れ自分を磨いていくこと、

そして常識を鵜呑みにせず考え抜くこと、そうした不断の努力が必要だ。

「常識を疑い自分のモノサシ作りを」——最初は戸惑っていた学生たちにも、授業を重ねるにつれてこのメッセージがおおむね伝わるようだ。おしゃべりが癖になってしまって、どうしてもそのメッセージを受け取ってもらえない学生が毎年一定数いるのは、何とも残念なのであるが。

ところで、私自身の主な研究フィールドはベトナムであり、学生とともにベトナムに行くこともある。ベトナムで学生交流を経験した学生たちは、自分たちよりも生き生きと活動しているベトナム人学生たちに出会って、「先進国に住む自分たちの方が進んでいる」という「常識」が揺らぐことが多い。そんなことから、学問をしていくきっかけは掴めるはずだ。

自分のモノサシが絶対ということはありません。おそらく一生かかってバージョンアップされていくものだと思う。大学で学ぶことを、そのモノサシ作りのきっかけにしてほしいと願っている。



発行日 平成19年10月  
 発行者 茨城大学 大学教育センター  
 水戸市文京2-1-1  
 029 (228) 8416 (学務課教養教育係)